

名古屋地理学会 2015 年度研究報告会

プログラム／要旨集

日 時：2015 年 7 月 4 日（土）10:00～16:30（途中休憩 11:30～12:45）

場 所：中部大学名古屋キャンパス 6 階 610 講義室（名古屋市中区千代田 5-14-22）

プログラム

午前の部 座長：大塚俊幸（10:00～11:30）

安積紀雄（名古屋産業大学名誉教授）：安積紀雄（2015）『続 地理と生きる』の紹介

林 上（中部大学）：サービス空間の地理学

午後の部 座長：高橋 誠／原 眞一（12:45～15:15）

酒井喜八郎（南九州大学）：オーストラリアの環境教育－ESD 教育とシティズンシップ教育の視点から

柿原 昇（愛知教育大学非常勤講師）：自然環境と防災～石巻市・南三陸町・宮古市で撮影した画像を用いた大学での授業展開の試み

田中城久：『信長公記』記載「笠寺砦」の比定地を考える

評議員会（11:45～12:45、8-C 講義室）

総 会（15:15～16:00、610 講義室）

茶話会（16:00～16:30、8-C 講義室）

午前の部

座長：大塚俊幸（10:00～11:30）

安積紀雄（名古屋産業大学名誉教授）：安積紀雄（2015）『続 地理と生きる』の紹介

『続 地理と生きる』という書名で、小生が入院中に思い・考え・構想を練ったものである。本書は 4 編により成り立っているが、そのうち 2 編を紹介する。1 つは、わが国最初の 1889 年（明治 22 年）市制施行について、もう 1 つは明治初期以来の金沢市の位置づけである。最初のものはわが国明治期最初に市制施行を果たした市は 39 市を数え、これは石高の大きい地域の中心地が明白である。次に県庁所在地については上記のうちの 32 市がそれに決定された。ただ、7 都市はその範疇から除外されている。わが国県庁所在地の大部分は城下町を起源として発展しており、一部、港町を母体とするものもあげられる。1889 年（明治 22 年）と 2014 年の現時点での市の人口の順位の間連については、現時点においては 1889 年（明治 22 年）39 の市制施行の市のうち、依然として上位 39 位以内を維持しているのは 20 市に減少した。

2 つ目は金沢は加賀百万石という大城下町の流れを継ぎ、明治中頃には人口約 10 万を有し、日本有数の日本海側の大都市であった。そのため、明治年間に旧制第 4 高等学校や陸軍の第 9

師団司令部も設置され、北陸拠点の都市として発展した。経済面でも数少ない日本銀行の支店も明治末に設けられ、金沢は日本海側の金融拠点都市に選ばれた。しかし、戦後は太平洋側の発展に較べ、日本海側は大きく遅れ、経済格差が著しくなった。ただ、金沢は北陸の中核都市のため、行政や民間の出先機関の進出がかなり推進され、非戦災都市のため、伝統的な建造物や名産品が多々残存し、それが観光資源として観光都市を作り上げている。他方、若者のあこがれるファッションの専門店の出店も遂行され、それらは富山や福井両県にも商圈を拡大し、とくに北陸初出店の専門店の増加が著しい。この結果、金沢は新旧対照的な要素が絡み合い、わが国でも特色ある町と評価されている。なお、今回は金沢については、兼六園や観光面については多方面で紹介されているので、ここではほとんど触れていない。

（『続 地理と生きる』の書物を既に手元にある方はお手数ですが、研究報告会時にご持参ください）

林 上（中部大学）：サービス空間の地理学

本研究の目的は、「サービス空間の地理学」がどのようなものを示すことである。そのために、まずサービスとは何かを明らかにし、つぎにサービスが取引される空間の性質について述べる。最後にサービス空間について考える地理学の学問としての役割を検討する。この研究の背景には、成熟した資本主義社会の今日的状況を、いかに学問的にとらえるべきかという動機がある。地理学が社会や経済の発展とともに歩いていくには、いかなる研究テーマが想定でき、また方法がありうるのか、その可能性を示したいという強い思いがある。

報告者は、農産物の栽培や工業製品の製造が、モノの性質を生物学的、物理的、化学的に変えるのに対し、モノ、人、情報の状態を変えるのがサービスだと考える。「変える」という点、また対象に「働きかける」という点で、製造業とサービス業の間には共通性がある。栽培の過程や製造の工程がより複雑化し専門的になるにつれてサービスの業務が増え、それが独立してサービス業になったというケースも多い。しかしその一方で、昔から現在に至るまで変わらず存在し続けてきた古典的なサービス業もある。サービスの中にはモノ以外に人や情報に働きかけるものもあり、とくに対象が人の場合はサービス提供時の感情表現が重要な意味をもっている。

地理学は空間の科学といわれてきたが、サービス空間の地理学はサービスの供給あるいは消費が行われる空間に注目する。この空間は単なる入れ物や容器ではなく、自然、社会、文化、政治などの要素が充填されている空間である。このため、サービスの供給や消費はこれらの要素の影響を受ける。良質なサービスが供給されるには、質の良いサービス空間でなければならない。人が直接、働きかけることの多いサービス活動では、供給者の能力が高いことに加え、サービスが供給される場所の雰囲気が良いことが求められる。これらの条件が満足できるものであれば、自ずとサービスの生産性は高くなる。

日本をはじめとする多くの先進諸国では、産業全体に占めるサービス業の割合は70~80%と高い。工業生産が新興国や発展途上国でも行われるようになり、先進諸国は工業生産を直接行うよりも、むしろ生産を間接的にコントロールしたり、消費対象を工業製品からサービスへ向かわせたりすることで利益を生み出そうとしている。これまで都市や地域を対象に研究を行ってきた地理学がさらに発展していくためには、サービスにもっと関心をもって研究を推し進めていかなければならない。

午後の部

座長：高橋 誠（12:45～14:15）

酒井喜八郎（南九州大学）：オーストラリアの環境教育－ESD 教育とシティズンシップ教育の視点から

本研究は、ESD 教育で先進的なオーストラリアのメルボルンの環境教育に焦点を当て、カリキュラム（ACARA）だけでなく実践を現地で収集し、ESD 教育とシティズンシップ教育の視点から分析することで、その特質を明らかにすることを目的とした。

幼稚園における継続的な森への遠足学習、小学校における廃棄物の分解を考える学習、中学校が連帯して他校の生徒を集めての体験学習を含む環境会議というように、それぞれの校種で、学校が〈自然〉や〈社会〉との関わりを重視しながら取り組んでいる。

一方でメルボルンの CERES 環境公園などの施設や green team のニュースレター報告などの活動も、学校の子どもたちを受け入れる上で充実している。つまり、〈自然〉とのつながりを学ぶことと同時に〈社会〉とのつながりを広げアクティブシティズンシップを育成していく教育が進められていることが明らかとなった。

これまでの考察から、わが国の地理教師が、学校で ESD 教育やシティズンシップ教育としての環境教育を行っていく上で whole school approach や green team などの環境教育の方法から学ぶことは多い。今後は、さらに、オーストラリアにおける ESD 教育やシティズンシップ教育に関する地理の授業や実践の収集と分析をすることが課題である。

柿原 昇（愛知教育大学非常勤講師）：自然環境と防災～石巻市・南三陸町・宮古市で撮影した画像を用いた大学の授業展開の試み

私は小学校免許状取得のための社会科研究 BI という選択科目で地理を教えている。近年、世界各地で様々な自然災害が発生し、多くの方が犠牲になるという悲しい出来事が頻発している。日本でも、地震、津波、火山噴火、土石流、台風など多様な災害が発生している。そのため、防災教育の重要性が認識されている。東海地方では、将来的に南海トラフ巨大地震及び津波の襲来が予想される。

また、2011 年 3 月に発生した東日本大震災は東北地方を中心として、東日本に想像を絶する大きな被害をもたらした。東北地方では、過去の経験から津波の襲来を予想し、ハザードマップ作成や防潮堤の建設などの防災対策を実施していたにもかかわらず、その想定をはるかに超える津波のため、甚大な人的・物的被害を受けることになった。とくに、三陸地方独特のリアス海岸地域や仙台平野に代表される低地に被害が集中した。今日においても、まだ多くの方が仮設住宅等での生活を余儀なくされている。さらに、福島県においては、福島第一原発の事故により、故郷を失った人が多く見られる。事故を起こした原発の廃炉に向けての作業も遅々として進んでいないのが現状である。

このような状況を踏まえ、社会科研究 BI の講座で、地形学習を終えた後、自然環境（地形環境）と防災というテーマで授業を実施している。教員を目指す学生としても、日常生活において防災意識を持つことは大切なことであると考え。そこで、2013 年 3 月と 2015 年 3 月に訪問

した石巻市・南三陸町・宮古市で撮影した画像等を用いて、津波のメカニズムや、これらの地域の津波被害状況と復興の現状について考察させたいと思い、この授業計画を立案した。この試みについて、皆様方の忌憚のないご意見等を頂ければ幸いである。

座長：原 眞一（14:30～15:15）

田中城久：『信長公記』記載「笠寺砦」の比定地を考える

織田信長の一世代記を綴った太田牛一著の『信長公記』は、戦国期の一級史料として評価されている。その中で「桶狭間の合戦」が記載されている首巻には、合戦前の桶狭間周辺の織田・今川戦線が詳しく書かれている。

攻防戦は信長の父織田信秀の死去に伴い臣下の土豪山口左馬助が今川方に寝返るところから始まる。山口氏は今の名古屋市緑区鳴海町に所在する鳴海城を拠点とし、領地は名古屋市南区の笠寺まで統治していたと考えられている。今川方と協力して織田領侵攻を展開し『信長公記』には「笠寺に取出要害を構へ、かつら山、岡部五郎兵衛・三浦左馬助・飯尾豊前守・浅井小四郎五人在城なり」と今川方をひきいて「笠寺砦」を構えている。その結果「尾州の内へ乱入」と記され、信長は一時苦境に立たされている。この「笠寺砦」についてはどこであるかはっきりしていない。地元の郷土史家は比定地を名古屋市南区松池町所在の「戸部城」として、現段階では最も有力な候補地と考えられている。

しかし本稿では歴史地理学から「戸部城」の地理的脆弱性を指摘し、「笠寺砦」の比定地を名古屋市南区西桜町所在の現「東宝寺」にあったと提起したい。